

夏の予言

首筋の汗疹に汗がはりついて
痛痒くさに目が覚めたら
誰もいなかった
猫もいなかった
「冷蔵庫にスイカあります」
とテーブルにメモ

ひとりぼっちでスイカを食む
シャワシャワと音が高く響く
赤いところを食べ終わると
空がスイカの代わりに赤く染まっていた
じっと見つめていると淋しさが膨らんで
溢れ出てきた涙が首筋の汗疹までつたい
痛さが沁みて余計に悲しくなって
しゃくりあげ泣いた

いつかみんなあの空に吸い込まれるんだ
みんないなくなるのは嫌だ

焼けた空はすました面持ちで
次にスイカを切って冷蔵庫に入れるのは
私なのだということにさえ教えてくれなかった
熱く潤んだ瞳で見渡したあの夏の夕暮れ